

世界経済分析の方法と課題

—『国際循環的成長の研究』御茶の水書房(2019年2月刊)の概要報告—

末 永 茂(元いわき明星大学)

問題の設定

①グローバル化が進み経済活動が国境を越えたものになったことに、異論を挟む人はいないであろう。だが、この地球的規模の展開を経済学的にどのように分析・把握するかは論者によって様々である。専門の名称も「国際経済学」と「世界経済論」がある。前者は各国間の経済関係つまり貿易と金融を分析対象にし、後者はいわば世界各国の構造分析に重点を置き、丸ごと把握する志向性を持っている。

だが、共通して旧社会主義諸国は分析対象から外す傾向があった。これは冷戦構造を踏まえて、経済交流が一定程度断絶しているという事情からである。また統計の作成方法も異なっており、単純比較が困難だったことに由来する。戦前にはドイツ・キール学派のハルムスが「世界経済学」と命名し、世界全体を一国経済の様に分析しようとする研究もあった。この学派は1913～33年まで活発に論陣を張ったが、1930年代のブロック経済化によって研究対象は変質した。当然ながら「世界経済学」は影響力を失うことになった。

さて、現代の世界情勢はどうであろうか。トランプ大統領の登場によって、保護主義的傾向がそれ以前と比べて強くなったとはいえ、基調において世界貿易や海外投資は自由貿易体制を維持している。

②「全球」とは中国語でグローバルを意味しているが、ここでは全地球的規模を表す気候システム研究分野の用語法から援用したものである。地球上の大気循環は国境など人為的な縄張りを考慮に入れるはずもなく、物理学的原理で変動・展開している。人類の諸活動も人間の様々な意思を介在して歴史展開するものであるが、何れ絶対限界ともいえる物理的障壁にぶち当たることも想定される。人口爆発は如何なる現象を伴って停止するのかは、誰にもわからないだろうが社会科学上の根本的課題である。

このように不確定な近未来を想定しつつ、現実の世界経済の課題を出来るだけ平明に説明したい。また、一つの学派に傾斜し過ぎないような論調に配慮したいとの思いが強い。そのため本書は書誌学的にならず、全体構成の議論に重点を置いて議論してきた。

③通貨・所得と財・サービスは「企業」「家計」「政府」の3つの経済主体間で流通している。これを「経済循環(国民経済の循環)」と規定している。また、景気の周期的変動を「景気循環(ビジネス・サイクル)」と呼んでいる。本書の「循環」という用語法は上記の二つ意味を重ね合わせることを意図している。つまり、全球経済は経済主体、国内経済、国際経済の相互依存関係とその変動周期を有機的に連関させながら展開している、ということを眼目に置きたい。